

## 人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる（Ⅰ） —南城市と那覇市のフィールドワークから—

増田 康弘

### 1. はじめに

かつて沖縄が「琉球」と呼ばれていた時代に、戦国の世があった。各地に按司<sup>1)</sup>と呼ばれる実力者が君臨し、勢力の拡大のために数々の戦を繰り広げていた。なかでも3つの勢力は大きな力を持ち、それぞれの地域を治めていた。今帰仁グスクを拠点にした北山（山北）、浦添グスクを拠点にした中山、そして大里グスク・南山グスクを拠点にした南山（山南）である。これを「三山」と呼ぶ。この三山を治める王たちは、明（中国）との間に朝貢関係を結び莫大な富を得、その富を背景に琉球の覇権を握るべく、しのぎを削ったのである。

しかし、時が流れ、戦乱の世に一応の終止符を打つ人物が登場する。佐敷の按司であった思紹（ししょう1354～1421：第一尚氏王統初代王）と尚巴志（しょうはし1372～1439：第一尚氏王統2代目王）親子である。思紹・尚巴志親子は、1406年に中山に攻め入り、当時の王であった武寧（ぶねい）を滅ぼし、思紹を中山王としたのである。その後、尚巴志は1416年に北山王の攀安知（はんあんち）を倒し、さらに1429年、南山王の他魯毎（たるみい）を滅ぼした。ここに三山統一が成し遂げられ、統一王統が生まれたのであった。琉球王国の誕生である。

琉球王国は、第一尚氏王統<sup>2)</sup>と第二尚氏王統<sup>3)</sup>とに区分される。第一尚氏王統とは、尚巴志が1406年に樹立した王統であり、七代63年間続いたとされている。一方、第二尚氏王統は、尚円を始祖とし、十九代410年間続いた王統である。では、第一尚氏と第二尚氏とに区分されているのはなぜだろうか。端的に言えば、「血が繋がっていない」ということである。第二尚氏王統は、第一尚氏の家臣であった金丸（のちの尚円）のクーデターによって誕生したとされるのが一般的である。

さて、琉球王国とはいかなる国であったのだろうか。少々飛躍的な考えではあるが、琉球王国という東アジアの小国が、時代の流れに翻弄されながらも、たくましく生き残

ろうとしてきた姿を知ることは、基地問題をはじめ、さまざまな課題を抱える現代の沖縄に、そして日本に何らかの示唆を与えるのではないだろうか。まずは、フィールドワークを通して悠久の歴史に触れ、琉球王国の姿を人物像の検討からとらえること、そして最終的には、人物像の検討を通して得られた知見を現代社会に照射し、新しい視点で社会を見つめることを目的としたい。ここでは、その第一歩として、筆者が行ったフィールドワークについてまとめ、琉球王国の一端に触れる。沖縄県南城市と那覇市の史跡を巡った報告である。

## 2. 南城市と那覇市のフィールドワークから—2015年10月24日実施

### (1) 百十踏揚の墓（ももとふみあがり1400前半～1400後半）

まず訪れたのは「百十踏揚の墓」である。彼女の墓は南城市玉城地区富里にあり、国民運動場の脇にひっそりと佇んでいる。

百十踏揚は尚泰久（しょうたいきゅう1415～1460：第一尚氏王統6代目王）の娘で、絶世の美女とうたわれた王女である。彼女は勝連城按司の阿麻和利（あまわり1400前半～1458）のもとへ嫁いだが、護佐丸（ごさまる1300代～1458）・阿麻和利の乱<sup>4)</sup>の後、大城賢雄（うふぐすくけんゆう1400代～1469か<sup>5)</sup>のもとに嫁ぐことになる。そして、余生は玉城で静かに過ごしたと言われている。

彼女の人生は時代に翻弄されたものであった。尚巴志によって三山統一が遂げられたとはいえ、未だ按司と呼ばれる群雄たちの勢いは止まらず、それに脅威を感じた国王は政略結婚を進めていたとされている。百十踏揚の父である尚泰久も例外ではなく、中城城按司の護佐丸の娘を妻にしている。そして、その妻との間に生まれた娘、つまり百十踏揚を勝連城按司の阿麻和利に嫁がせるのである。そうしておけば、力をもった按司たちが自分を攻めることはないと考えたのであろう。彼女を語るうえで外せないことは、何とんでも護佐丸・阿麻和利の乱である。この戦いを通して、結果として彼女は自分の祖父（護佐丸）を夫（阿麻和利）に討たれ、夫（阿麻和利）を父（尚泰久）に討たれるのである。さらに、のちに結婚した大城賢雄をも亡くすことになる。

数奇な運命をたどった彼女は今、兄の三津葉多武喜（みつばたぶき<sup>6)</sup>とともに静かに眠っている。なお、百十踏揚は本名ではなく、最高神女としての神名であり「永遠に気高い」という意味である<sup>7)</sup>。彼女の墓からは高級神女の証である大きな金の簪が発見されている<sup>8)</sup>。「百度踏揚」とも記される。

### (2) 尚布里の墓（しょうぶり1400前半～1454・1464）

次に訪ねたのは「尚布里の墓」である。尚布里は、琉球を統一した尚巴志の六男にあたり、甥の尚志魯（しょうしろ1400前半～1454）と王位を争った人物である。彼の墓は

南城市玉城地区當山の県道48号線沿いに存する。

尚巴志後の王位は、三代続けてめまぐるしく変わったという。3代目王であった尚忠(しょうちゅう1391~1444)は在位5年、4代目王の尚思達(しょうしたつ1408~1449)も在位5年、5代目王の尚金福(しょうきんぷく1398~1453)<sup>9)</sup>に至っては在位わずか4年という短期政権であった。そして、6代目王の座をめぐる勢力争いが始まるのである。志魯との争い(志魯・布里の乱)は次第にエスカレートし、結果的に首里城は消失するのであるが、それほどの激しい戦いをしながら、どちらも王位につかなかった(つけなかった)というのも皮肉な話である。尚志魯の墓は、どこに存するのだろうか。



百十踏揚と三津葉多武喜の墓



尚布里の墓

### (3) 尚泰久の墓(しょうたいきゅう1415~1460)

次に「尚泰久の墓」である。前に述べた通り、尚泰久は百十踏揚の父であり、第一尚氏王統の6代目王である。志魯・布里の乱によって二人の後継者を失い、その結果、尚巴志の七男であった尚泰久が即位する。彼の墓は、南城市玉城地区富里の国道331号線沿いの大きな岩の側面にある。

彼は万国津梁<sup>10)</sup>を掲げ、王権の安定を目指したとされている。また仏教に帰依し、琉球において初めて本格的な普及に尽力したとも言われている。前にも述べたが、当時の家臣に、金丸(かなまる1415~1476)という人物がいた。のちに、この金丸によって第一尚氏王統は滅ぼされることになる。いつの時代も、跡目争いや国家に対する一撃(クーデター)などはあるものなのだろう。なお、尚泰久の墓の隣には、彼の長男である安次富加那巴志(あしとみかなはし)<sup>11)</sup>が眠っている。

## (4) 佐敷上グスク (さしきういぐすく)

「佐敷上グスク」は、尚巴志とその父である思紹の居城跡だと言われている。佐敷上グスクは、南城市佐敷の佐敷小学校裏の丘陵にある。

尚巴志は、前に述べた通り、父の思紹とともに三山を統一した人物であるが、もともと思紹が佐敷の按司であり、尚巴志は小按司であった。その後、尚巴志が31歳のとき、思紹の後を継いで佐敷按司となったとされる。思紹から「自分に代わって按司となり、人民を救う」ことを託された尚巴志は、まず大里按司を討つことに成功し、その名を島中にとどろかせた。次に尚巴志が向かったのが中山であった。当時の中山王であった武寧は、日ごろの傲慢さが仇となり、諸按司の協力を得ることができず滅んだのであった。そして、尚巴志は中山王に思紹を推戴し、第一尚氏王統を樹立した。さらに、尚巴志は北山に攻め入る。難攻不落の城であった今帰仁城に対し、尚巴志が採った戦略が敵の武将である本部平原 (もとぶたいはら) に「賄賂を渡す」といったものであった。尚巴志は、口の達者なものに利害得失を説かせ、平原を寝返らせることに成功したという。これがきっかけとなり、ときの北山王であった攀安知は滅びることとなる。そして、尚巴志が最後に向かったのが南山である。ときの南山王であった他魯毎は、贅沢な生活を送り、酒色にふけり、政治につとめなかったため、周囲から恨まれ、諸按司も寄りつかなくなっていた。そのような状況下、尚巴志のもつ「金屏風」と他魯毎が所有する井戸「嘉手志川 (かでしがー)<sup>12)</sup>」を交換するという出来事が起こる。嘉手志川を自分のものにした尚巴志は、自分に従う百姓に水を分け、従わないものには使用を禁ずることによって、自分の味方を増やしていくのであった。そして、周囲の按司たちを集めて南山に攻め入り、討伐に成功した。ここに三山統一が実現したのである。

三山統一を成し遂げた尚巴志は、首里遷都を行う。三山時代の中山王の居城は浦添城であったが、新たな地に居城を構えた。首里城である。一説によると、尚巴志が首里へ居城を移す際に、佐敷上グスクの城郭の石を運び出したとされている。どのような思いで運び出したのであろうか。いずれにしても、大規模な工事であったことは想像に難くない。首里城は、それまでの「戦のための城」ではなく、外国からの使者を迎える「もてなしの城」として造営された。首里城の建築をはじめとする大規模工事の指揮をとったのが懐機<sup>13)</sup>である。懐機は明 (中国) から派遣された人物で、国王を補佐する「国相」という役職につき、第一尚氏の国王五代にわたって仕えたという。

尚巴志は海外交易にも積極的に取り組んだ。それまでの琉球とシヤム (タイ) との通商だけではなく、航路の開拓に努め、パレンバン (スマトラ島南東部) やジャワなどへも交易船を派遣していった。この東南アジア貿易で手に入れた品々は、明 (中国) へと朝貢という形でもたらされ、琉球はアジアの貿易大国となったのである。

さて、話を佐敷上グスクに戻すが、1つ疑問に思うことがある。ここは前に述べた通り、思紹と尚巴志の居城跡である。つまり、第一尚氏王統の初代王と2代目王の住まい



である。第二尚氏王統は、その誕生の際に、第一尚氏王統のすべてを焼き討ちにしようとしたわけであるが、なぜか東御廻り（あがりうまーい<sup>14</sup>）の拝所の1つになっているのである。東御廻りとは、琉球開闢の神とされるアマミキヨ<sup>15</sup>がニライカナイ<sup>16</sup>から渡来して住みついたと伝えられる霊地を巡拝する行事のことである。この行事は尚巴志による巡礼が起源とされており、なぜそれを第二尚氏王統においても続けたのか。より正確に言えば、行事そのものが続くことには違和感を覚えることはないが、なぜ第二尚氏王統時の巡礼のコースにこの場所が入っているのかということである。すべてを焼き討ちにしようとしたにもかかわらず。

現在は沖縄によくみられるグスクの石積みは存在しないが、敷地内には「佐敷ノロ殿内」「内原の殿」「かまど跡」などがあり、鳥居をくぐり階段を登った先には、「拝殿」や鮫川大主<sup>17</sup>、思紹、尚巴志、尚忠、尚思達、尚金福、尚泰久、尚徳を合祀した「月代宮（つきしろのみや）」が建立されている。



尚泰久（手前）と安次富加那巴志（奥）の墓



月代宮（佐敷上グスク）

##### (5) 佐敷ようどれ

「佐敷ようどれ」は、思紹とその家族が眠る墓である。この墓は、南城市佐敷の航空自衛隊知念分屯基地内にある。墓の脇にある案内板には、「以前は佐敷城近くの崖下にあったが、風雨による損壊が目立ったため、1764年に現在の場所に移された」とある。なぜ基地のなかに墓があるのだろうかとも思うのであるが、無論、墓が先にあり、米軍に接収され、その後に自衛隊の基地になったということである。

基地のゲート前に到着すると、迷彩服を着た自衛隊員が出てくる。用件を伝えると基地の敷地内に入ることができるのであるが、名前や住所などを記入するといった手続きを必要とする。それが済むと、いよいよ墓に向かうのであるが、当然のように自衛隊員もついてくる。写真撮影も可能、ただし墓だけ。基本的にはいつでも入れるのであるが、情勢が変わらなければという条件つき。年間に400人程度の人が拝みに来るそうである。

なお、現地の石碑には「佐敷ゆうどれ」と刻まれている。

さて、思紹は第一尚氏王統の初代王である。思紹の父である鮫川大主は伊是名島の住民であった。鮫川大主は人徳があり、周囲から崇められていたが、島に飢饉が起こったことをきっかけに、島から離れ本島へ向かうこととなる。本島についた彼は、転々と居住地を変え、最終的に島尻の場天の浜につく。彼が漁をして生活を営んでいると、ある日、大城按司と出会う。その後、大城按司の娘と結婚し、一男一女をもうける。その男子は成長し苗代大親となり、女子は場天ノロ<sup>18)</sup>となった。苗代大親は、佐敷に住む美しい娘と恋仲になり、やがて子どもをもうける。この縁は娘の親の許しを得ていなかったことから、娘は逃げ苗代樋川の森に身を隠した。娘がどうしたものかと悩んでいると、白髪の老人が現れ、子どもの素性をたずねたという。娘が素直に答えると、老人は「この子は、いずれ国王になるべき相がある。苗代大親に返すべきだ」と告げたとされる。この苗代大親が思紹であり、彼が育てた子どもが尚巴志である。その後、思紹と尚巴志は佐敷を治め、前述の通り、第一尚氏王統を樹立したのである。

#### (6) 尚徳王陵墓跡 (しょうとく1441~1469)

ここまでの史跡は、すべて南城市であったが、ここからは那覇市に移る。まず訪れたのは、「尚徳王陵墓跡」である。現在はどこに眠っているのだろうか。この陵墓跡は、那覇市識名の住宅街の道路沿いに存する。筆者がこの場所を訪れたときは、「第一尚氏王統 第七代尚徳王陵墓跡」と書かれた石碑が根元から折られていた。台風の仕業であろうか。それとも誰かが故意に折ったのであろうか。

さて、尚徳は第一尚氏王統7代目王であり、第一尚氏王統の最後の王である。琉球王国の歴史書には、かなり悪く書かれている。というよりも、罵られているといったほうが的確かもしれない。本当はどのような人物であったのか。一般的には、歴史書に書かれているのだから間違いないだろうということになるのであるが、この歴史書は第二尚氏王統時代になってから編纂されているのである。第一尚氏王統の最後の王を罵り、第二尚氏王統誕生の正当性を訴えるというのは穿った見方であろうか。

なお、第二尚氏王統の最初の王は、尚円 (しょうえん1415~1476) である。この尚円と第一尚氏王統の家臣であった金丸は、同一人物である。つまり、第一尚氏王統は金丸のクーデターによって滅ぼされ、第二尚氏王統が誕生し、その最初の王に金丸が尚円として即位したということである。では、なぜ尚姓を名乗ったのか。当時の琉球王国は明 (中国) との間に冊封関係 (君臣関係)<sup>19)</sup> を築いており、国王が代わるたびに明 (中国) からの承認を得ることになっていた。そのため、これまでずっと尚氏が国王を担ってきたにもかかわらず、突然「このたび即位した金丸です」というのは問題があるということとで、引き続き尚姓を名乗ったとされている。

一説によると、尚徳は喜界島征討へ出かけ戦勝し、その報告のために渡った久高

島<sup>20)</sup>で大里家のクンチャサノロ<sup>21)</sup>と恋に落ちたとされる。尚徳は島を離れがたく、しばらく滞在。その間に首里城でクーデターが勃発し、第一尚氏王統は滅ぶことになったという。王位を失った尚徳は帰路、海に身を投げたとされている。



佐敷ようどれ



尚徳王陵墓跡

#### (7) 羽地朝秀の墓 (はねじちょうしゅう1617~1675)

ここからは、第二尚氏王統時代に活躍した政治家の墓を巡った報告となる。まずは「羽地朝秀の墓」である。彼の墓是那覇市首里平良町の山の中に存する。この墓は、彼の父である朝泰の代に国王から拝領したもので、当初は掘込墓であったが、のちに現在の亀甲墓の形に似た姿に改修されたと言われている<sup>22)</sup>。

羽地朝秀は、第二尚氏王統3代目王尚真の第一子の血を受け継ぐ王族の家系に生まれた。彼は若くして地頭となり、さらには薩摩に留学し学業を修め、薩摩との関係を築く重要な役割を果たした。そして、10代目王の尚質、11代目王の尚貞のもと、薩摩侵攻以降の疲弊していた琉球王国を立て直していったのである。彼は当時の政治の最高地位である摂政についた、近世琉球王国のあり方を示した偉大な政治家であった。彼が実施した政策をまとめたものに『羽地仕置 (はねじしおき)』がある。その内容は、①質素儉約、②古い伝統行事の見直し、③役人の不正の取り締まり、④風俗の乱れの規制、⑤士族への諸芸の奨励、⑥身分の明確化など多岐にわたる。これらの改革は、琉球は日本と祖先を同じくする「日琉同祖論」という思想のもとに進められたとされている。

また彼は摂政になる以前に、王命によって琉球王国の正史である『中山世鑑』を編纂したことで有名である。これも「日琉同祖論」に基づいてまとめられたようで、太古から琉球と日本との関わりがあったことが史実として記されている。では、なぜ彼は「日琉同祖」にこだわったのか。それは偏に薩摩との関係を考えたからであろう。彼は薩摩と琉球は主従関係にあると見なし、領主権力の目に映る琉球と琉球人のイメージの向上に努めたのである<sup>23)</sup>。なお、『中山世鑑』は現代語訳されたものがある<sup>24)</sup>。



## (8) 宜湾朝保の墓 (ぎわんちょうほ1823~1876)

次に「宜湾朝保の墓」である。彼の墓は那覇市首里大名町に存する。宜湾朝保は、琉球藩を受け入れた琉球王国最後の政治家である。つまり、明治政府から琉球を日本の藩とし、国王を藩王とする勅命が出され、それを受諾したということである。これにより、いわゆる琉球処分が段階的に行われることになったのである。彼は多難な琉球を新しい時代に導こうとしたわけであるが、反対する者も多く、激しい非難にさらされ三司官<sup>25)</sup>を辞することになるのである。

なお、彼は羽地朝秀の「日琉同祖論」に影響を受けたとされ、未定稿ながら琉球語彙を編纂して、『古事記』『日本書紀』『万葉集』などにおける上代日本語と琉球方言とを比較し、両者に共通点があるとしている<sup>26)</sup>。また、彼は歌人としても有名で「沖縄最高の歌人」とも呼ばれている。

彼の死の3年後、時代が大きく動き出す。1879年3月27日、明治政府の役人であった松田道之(1839~1882)<sup>27)</sup>は軍隊と警官隊を率いて首里城に乗り込み、首里王府に対し、琉球藩の廃止と沖縄県の設置を宣言したのである。同年3月31日、最後の国王であった尚泰(しょうたい1843~1901:第二尚氏王統19代目王)が継世門<sup>28)</sup>から退城したのであるが、国王の行列は人々の泣き叫ぶ声に包まれていたとされている。



羽地朝秀の墓



宜湾朝保の墓

## (9) 蔡温の墓 (さいおん1682~1761)

次に「蔡温の墓」を訪ねた。彼の墓も、宜湾朝保の墓と同様、那覇市首里大名町に存する。蔡温は中国から琉球に移住した者の子孫である。少年期の彼は、反抗的で怠け者であったという。その後、学問に目覚め書に明け暮れ、清(中国)に渡り実学の思想を学んだ。帰国後、三司官の地位につき、政治はもちろん、農業、林業、科学、思想、学問など、多くの分野において才能を発揮したとされる。彼の政策には、①農業振興、②商工業振興、③治山事業、④治水事業、⑤国土再編、⑥儒教道德の徹底などがあったようである<sup>29)</sup>。

彼と対立していた人物に平敷屋朝敏(へしきやちょうびん1700~1734)<sup>30)</sup>がおり、彼



は蔡温を批判する文書を薩摩に提示したものの、薩摩はこれを取り合わず琉球王府に送り、それを知った王府が平敷屋朝敏、友寄安乗（ともよせあんじょう1677～1734）<sup>31</sup>ら15名を処刑するという事件があった。これを「平敷屋・友寄事件」という。当時の蔡温の力は絶大だったのであろう。“蔡温の前に蔡温なし。蔡温の後にまた蔡温なし”とたたわれていたようである。

なお、蔡温の父は蔡鐸（さいたく1645～1725）といい、彼は羽地朝秀による『中山世鑑』を漢文に訳し、部分的に修正した『中山世譜』を編纂している。これを「蔡鐸本」と呼び、現代語訳したのも出版されている<sup>32</sup>。『中山世譜』は、蔡温によって加筆・修正され、その後も史官によって書き継がれた。これを「蔡温本」と呼ぶ。また、蔡温の教えを現代語訳したのも出版されており、その文献における蔡温の紹介文によると、「数多くの著作を残したことで知られ、その内容は国家観や政治の心得などを語ったものから、道德書、農林業の技術書まで多岐にわたる」「沖縄で初めての自叙伝を書いた人物である」とされている<sup>33</sup>。それらの教えは、その後の政治家の指針となり、“蔡温の後、三司官は4人いる”とまで言われたとされる。

#### (10) 西の玉陵（いりのたまうどうん）

最後に訪ねたのは「西の玉陵<sup>34</sup>」である。那覇市首里山川町にあるため「山川陵」とも呼ばれている。西の玉陵は、一説によると、尚円と尚寧（しょうねい1564～1620：第二尚氏王統7代目王）の墓とされている（公式には、尚寧は「浦添ようどれ<sup>35</sup>」に祀られているとされる<sup>36</sup>）。のちに、尚円の遺骨は首里城近くの「玉陵（たまうどうん）<sup>37</sup>」に移されるわけであるが、それまでの25年間、ここに眠っていたことになる。

西の玉陵は、首里の住宅街の先にあり、あまり知られておらず、拝みに来る人も少ないようである。また、那覇市が管理しているとのことであるが、手入れが行き届いておらず、石組みもところどころ崩れている状態であった。



蔡温の墓



西の玉陵

### 3. まとめ

今回のフィールドワークでは10か所の史跡を訪ねたわけであるが、ここで第一尚氏王統時代と第二尚氏王統時代とに分け、年代順に整理してみよう。まず、第一尚氏王統時代であるが、思紹・尚巴志親子は「佐敷上グスク」を居城とした按司であったが、徐々に力を蓄え、遂には三山統一を実現した。思紹は第一尚氏王統の最初の王となり、在位は16年(1406~1421)であった。その後、王位についたのが息子の尚巴志である。尚巴志は首里城を拠点に王国の基礎を固め、また活発な貿易活動を展開し、貿易国家としての礎を築いたとされる。彼の在位は18年(1422~1439)であり、第一尚氏王統では最も長い在位期間となる。尚巴志の後、彼の次男であった尚忠が3代目王となったが在位5年(1440~1444)、その後4代目王として尚忠の世子であった尚思達が即位するも在位5年(1445~1449)、次いで5代目王として尚思達の叔父であった尚金福が即位するものの在位4年(1450~1453)で退くこととなる。そして、尚金福の死後、王位継承をめぐる、彼の世子であった尚志魯と弟であった尚布里が激しい戦いを演じるのである(志魯・布里の乱)。この戦によって首里城は焼失、志魯・布里ともに討ち死にし(諸説あり)、6代目王は尚巴志の七男であった尚泰久が継ぐことになる。彼の時代も、護佐丸・阿麻和利の乱などによって政権基盤が揺らぎ、在位7年(1454~1460)で退く。そして、彼の娘が百十踏揚であり、前に述べた通り、数奇な運命をたどった王女であった。第一尚氏王統最後の王は、尚泰久の三男であった尚徳である。彼の在位は9年(1461~1469)であった。ここに金丸のクーデターが起こり、第一尚氏王統は63年をもって幕を閉じたのである。

次に、第二尚氏王統時代であるが、ここでは3人の著名な政治家についてまとめよう。まずは、羽地朝秀である。彼は第二尚氏王統10代目王の尚質、11代目王の尚貞のもと、薩摩侵攻以降の疲弊していた琉球王国を立て直した人物である。琉球王国初の正史である『中山世鑑』を著し、その後、当時の政治の最高地位である摂政となり「羽地仕置」を実施した。次に、蔡温である。彼は中国から渡来した久米三十六姓<sup>38)</sup>の子孫であり、琉球王国の役人の最高地位である三司官として活躍した人物である。政治以外にも、さまざまな分野に力を発揮し、琉球が生んだ最大の政治家とされている。次に、宜湾朝保である。彼は近世琉球末期の政治家である。若くして三司官の地位につき、蔡温の再来と期待されたものの、明治政府からの琉球藩の設置を受諾したことを契機に、非難にさらされ三司官を辞することになる。そして彼の死後、1879年に明治政府によって首里王府に対し琉球藩の廃止と沖縄県の設置が言い渡され、第二尚氏王統は終焉を迎えた。なお、羽地朝秀・蔡温・宜湾朝保は、儀間真常(ぎましんじょう1557~1644)<sup>39)</sup>・程順則(ていじゅんそく1663~1734)<sup>40)</sup>とともに「琉球の五偉人<sup>41)</sup>」に数えられる。

最後に、なぜ第一尚氏王統の国王や関係者の墓が、首里から離れたところに散在して

いるのかという点に触れておく。それは、前にも述べた通り、第二尚氏王統誕生の際、第一尚氏王統にまつわるすべてのものを無くそうとする動きがあったためとされている。当然、国王や関係者の墓もそのなかに含まれていたことであろう。そのため歴代国王の遺骨を近しい者が持って逃げたということなのである。今回は南城市を巡ったが、尚巴志、尚忠、尚思達の墓は、本島中部の読谷村の森の中に存在する。その辺りは米軍の嘉手納弾薬庫となっているが、その一部が黙認耕作地<sup>42)</sup>になっているため入ることができるのである。

さて、これで第一尚氏王統歴代の王の墓は、ほとんど巡ったことになる。尚巴志、尚忠、尚思達の墓は2007年8月に訪ねている。そして、今回の思紹、尚泰久、尚徳。第一尚氏王統は七代続いたとされている。ここに名前がないのは、尚金福である。どこに眠っているのか、資料を探しても出てこない。文献で調べても、インターネットで検索しても、わずかに城間村シレガ原に埋葬されたとか、米軍基地内にあるとかくらいしか見当たらない。ただし、浦添市に遥拝所が存するようである<sup>43)</sup>。ということは、その拝む先に眠っているのであろうか。誰にも知られることなく静かに佇んでいるのか、それとも現存しないのか。なお、第二尚氏王統歴代の王や王妃の墓は、首里城近くにある「玉陵」である。こちらは世界遺産。大きな隔たりを感じるのは筆者だけだろうか。

#### 4. おわりに

ここに記述した内容については、とても「研究」などと呼べるレベルにないことを筆者も自認しており、これを足がかりとして学びを深め、「研究」になるべく努めていきたいと考えている。そのため本稿に登場した人物をより深く検討すると同時に、より時間と労力を費やしフィールドワークを行いたい。現在、筆者が調査を考えている史跡は、天山ようどれ<sup>44)</sup>、尚泰久陵墓跡<sup>45)</sup>、尚金福遥拝所、尚巴志、尚忠、尚思達、護佐丸、阿麻和利、大城賢雄、謝名利山（じゃなりざん1549～1611）<sup>46)</sup>、儀間真常、程順則の墓である。

琉球王国時代に活躍した人物に迫ることによって、なんとかその時代との距離を縮めることはできないだろうか。優れた人物が生きていた時代を知り、その人物の思想や行動を内側から捉え、そしてその人物が現代に生きていたならばどのような生き方をするのかを考える。そこから新しい視点を見出したい。今後もフィールドワークを続けながら、琉球王国時代に活躍した人物や起こった出来事を時代に沿って整理し、それらが物語る意味を明らかにすることが筆者の当面の課題である。歴史を学ぶことが、未来を模索することであると信じて。

## 注

- 1) 琉球王国の位階の1つ。13世紀になると城塞としてのグスクを築き、周辺地域を支配した。
- 2) 尚巴志が1406年に樹立した王統で、七代63年間続いた。①思紹、②尚巴志、③尚忠、④尚思達、⑤尚金福、⑥尚泰久、⑦尚徳。
- 3) 尚円を始祖とし、十九代410年間続いた王統。①尚円、②尚宣威、③尚真、④尚清、⑤尚元、⑥尚永、⑦尚寧、⑧尚豊、⑨尚賢、⑩尚質、⑪尚貞、⑫尚益、⑬尚敬、⑭尚穆、⑮尚温、⑯尚成、⑰尚灝、⑱尚育、⑲尚泰。
- 4) 護佐丸が国王に反逆を企てているとして、国王の許しを得た阿麻和利が護佐丸を討つたとする乱。その後、阿麻和利は首里王府にも攻め入ろうと企てたが、百十踏揚と家臣の大城賢雄に見破られ失敗。これが契機となり、阿麻和利は失脚した(ほかに諸説あり)。なお、護佐丸は琉球戦国時代に活躍した猛将であるのと同時に、城づくりの名人でもあり「座喜味城」や「中城城」を築城している(ともに世界遺産)。一方、阿麻和利は“大和の鎌倉に喩えられるような”勝連をつくりあげた英雄である。これまで彼は、護佐丸の「忠臣」に対して、「奸臣」というイメージが強かったが、近年では再評価されつつある。
- 5) 阿麻和利の家臣で、「鬼大城」と呼ばれた武将。第一尚氏王統の再興を目指す、新王朝軍に攻められ自害した(ほかに諸説あり)。
- 6) 尚泰久の次男。本文中では百十踏揚の兄と記したが、弟とする資料も存在する。
- 7) 井上秀雄監修、JCC出版部著(2011)『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版、39ページを参照のこと。
- 8) 同上
- 9) 尚巴志の五男。港湾都市であった那覇の浮島と沖縄本島とをつなぐ約1kmの海中道路「長虹堤」を築くために、王相の懐機に工事を命じ、完成させたことでも有名である。
- 10) 正式には「旧首里城正殿鐘」という。尚泰久の命で铸造され、首里城正殿に掲げられた。万国津梁とは「世界を結ぶ架け橋」の意味。この鐘には以下の文言で始まる銘文が刻まれている。「琉球国は南海の勝地にして 三韓の秀(しゅう)を鍾(あつ)め 大明(だいみん)を以て輔車(ほしや)となし 日域(にちいき)を以て唇齒(しんし)となす 此の二者の中間に在りて 湧出する所の蓬莱(ほうらい)の島なり 舟楫(しゅうしゅう)を以て万国の津梁となし 異産至宝(いさんしほう)は十方利(じっぽうさつ)に充滿せり……」。これを現代語に訳すと、「琉球国は南海の景勝の地にあつて、朝鮮のすぐれたところを集め、中国と日本とはとても親しい関係にある。この日中の間にあつて湧き出る理想の島である。船を操って万国の架け橋となり、めずらしい宝はいたるところに満ちている……」となる。なお、これを記したのは、相国寺の禅僧であった溪隠である。
- 11) 尚泰久の長男で、百十踏揚の兄にあたる。「金橋」とも記される。
- 12) 現在の糸満市大里に存する。「嘉手志井」「嘉手志湧井」とも記される。
- 13) 第一尚氏王統時代の政治顧問であるとともに、久米村の華人集団をまとめる立場にあった。また、彼の才能は政治のみならず、建築や土木にも発揮され「長虹堤」のほか、首里城外に「龍潭」や「安国山」を造成し、花木を植えて中国風の遊園をつくったとされる。
- 14) 聖地巡礼。現在伝えられている巡拝コースは、①園比屋武御嶽、②与那原親川、③御殿山、④馬天御嶽、⑤佐敷上グスク、⑥テダ御川、⑦斎場御嶽、⑧知念グスク、⑨知念大川、⑩ミントングスク、⑪仲村渠樋川、⑫アイハント御嶽、⑬ヤハラヅカサ、⑭潮花司、⑮浜川御嶽、



- ⑯藪薩御嶽, ⑰受水走水, ⑱玉城グスク, ⑲玉城祝女殿内, ⑳志堅原仁川とされている(門中によって巡拝のルートや訪れる聖地の数は異なる)。
- 15) 国づくり神話に登場する琉球開闢の神。浄土宗の僧であった袋中が著した『琉球神道記』や羽地朝秀が編纂した『中山世鑑』などにおいて語られている。
- 16) 他界あるいは海の彼方にあるとされる理想郷のこと。沖縄県だけではなく、鹿児島県奄美群島などの地域にも伝わる。
- 17) 思紹の父。伊平屋島の出身とされる。
- 18) 一般的には「馬天ノロ」と記す。佐敷間切を治めたノロで、「聞得大君」以前では、かなりの高位の神女であったとされる。
- 19) 中国(当時は明)の周辺国の王(たとえば琉球国王)が、中国皇帝に貢物を捧げ、皇帝からその国の王であるとお墨付きを得る関係こと。琉球国王の代替わりが起こると、中国皇帝の勅書や王冠などを携えて「冊封使」と呼ばれる使者が遣わされ、琉球は国をあげて準備や接待を行った。この公式なもてなしの行事を「冊封七宴(7つの宴が行われた)」といい、豪華な宮廷料理がふるまわれ、華やかな芸能が演じられた。
- 20) 知念岬の東方海上約5.3kmに浮かぶ島。琉球の始祖であるアマミキヨが降臨し、五穀を初めて伝えた地とされ、「神の島」ともいわれる。ノロ(神女)制度や12年に一度行われる儀式「イザイホー」など、民俗学的にも貴重な島とされ、多くの神聖な祭祀が受け継がれている。なお、「イザイホー」は島で生まれ育った30歳から41歳までの女性が祖母の霊力(セジ)を受け継ぎ、島の祭祀組織に加入するために行われる成巫式であるが、1978年を最後に該当者がいないため行われていない。
- 21) 国司祝女。大里家の美しく霊力(セジ)高い神女であったとされる。
- 22) 上原幸典(OCVB認定平和ガイド)作成の資料より引用。
- 23) グレゴリー・スミッツ著、渡辺美季訳(2011)『琉球王国の自画像—近世沖縄思想史—』ぺりかん社、107ページを参照のこと。
- 24) 諸見友重訳注(2011)『訳注 中山世鑑』琉球弧叢書24、榕樹書林
- 25) 琉球王国の宰相職。首里王府の実質的な行政の最高責任者とされる。
- 26) 眞境名安興(1993)『眞境名安興全集 第一巻』琉球新報社、19ページを参照のこと。
- 27) 明治時代の内務官僚。明治政府の琉球処分官として、首里城において「琉球処分」の方針を伝えた。
- 28) 首里城の東側にある門(裏門)。別名「すえつぎ御門」という。国王が死去した際、世継ぎの王子がこの門から城内に入り、王位継承の儀式が行われたという。
- 29) 佐藤亮(2011)『蔡温の言葉—琉球宰相が残した物語り』ボーダーインク、14ページを参照のこと。
- 30) 琉球の和文学者。組踊「手水の縁」、擬古文「貧家記」「苔の下」「万歳」などを残した。
- 31) 琉球きっての名家の出身で、薩摩に対する年頭慶賀使などを務めた王府高官。彼の兄(美里親方安満)は三司官であり、蔡温の同僚であったことは興味深い。
- 32) 原田禹雄訳注(1998)『蔡鐸本 中山世譜』琉球弧叢書4、榕樹書林
- 33) 佐藤亮(2011)『蔡温の言葉—琉球宰相が残した物語り』ボーダーインク
- 34) 尚円と尚寧が眠るとする説、尚真の長男である尚維衡が眠るとする説、尚泰の七男である尚時が眠るとする説、王妃の墓とする説、国王・王妃・世子・世子妃以外の家族の墓とする

- 説、夭折した王子や側室の墓とする説など諸説ある。なお、沖縄の方言では「東」「西」「南」「北」を、それぞれ「あがり」「いり」「ふえー」「にし」と読ませる。
- 35) 公式には、英祖と尚寧の墓とされる。「ようどれ」は「夕風」「極楽」などの意味をもつ。
- 36) 渡久地十美子 (2011) 『ほんとうの琉球の歴史—神人が聞いた真実の声』角川学芸出版によると、尚寧は「西の玉陵」に眠っており、「浦添ようどれ」に在るのは謝名親方であるとしている。謝名親方は、尚寧時代の三司官の一人であり、島津侵攻の際、尚寧とともに島津家に囚われた人物である (国王ほか100名もの高官が薩摩に連れ去られた)。渡久地 (2011) によると、薩摩は尚寧と三司官に対して、島津家への忠誠を誓わせる起請文を出すよう要求したが、謝名親方だけが琉球の誇りを捨てず最後まで抵抗した結果、釜茹での刑に処されたという。彼の壮絶な最期を聞いた尚寧は嘆き悲しみ、帰国後「浦添ようどれ」に彼の墓所を造ったとされる。
- 37) 1501年に、尚真が父である尚円の遺骨を改葬するために築いたもので、その後、第二尚氏王統の陵墓となった。西の玉陵に対して、東の玉陵と呼ばれる。
- 38) 明の時代に閩 (現在の福建省) から琉球に渡来した職能集団のこと。彼らは那覇の久米村 (現在の那覇市久米) に定住したことから、そのように呼ばれるようになった。また、閩から渡来したことから「閩人三十六姓」とも呼ばれる。なお、「三十六姓」とは、三十六人を表すのではなく、数の多いことを意味する。当時の中国では、「三十六」は「とても多い」ことを意味していた。
- 39) 沖縄産業の礎を築いた人物とされ、その名を琉球史に残している。彼の功績は、①甘藷の普及、②木綿織の普及、③黒糖生産の普及、④浄土宗の普及など多岐にわたる。特に、①に関しては野国総管が中国から持ち帰った甘藷をもらいうけ、その栽培方法の普及に尽力したこと、④に関しては浄土宗の名僧であった袋中上人の教えを受けたことで有名である。なお、袋中上人が伝えた浄土宗は、踊り念仏を定着させ、やがてエイサーへと発展するきっかけをつくったとされる。
- 40) 中国にわたり学問を深め、政治家、学者、教育者として活躍。中国から『六論衍義』を持ち帰り琉球に広め、また航海の書『指南広義』を記した。1718年には琉球で最初の学校「明倫堂」を設立した。
- 41) 伊波普猷と眞境名安興による著書。
- 42) 在日米軍が接収した軍用地のうち、米軍が地主などの住民に対して使用を認めている土地のこと。
- 43) 浦添市城間に存するとのこと (上里隆史 (2012) 『琉球戦国列伝—駆け抜けろ! 古琉球の群星たち!』ポーターインク, 117ページ)。
- 44) 「天山陵」「天山御墓」ともいう。15世紀前半に、尚巴志の墓として造営された。第一尚氏滅亡後は、第二尚氏王族の北谷家の墓として使われ「天山御墓」と呼ばれた (安里進 (2011) 「琉球王国の陵墓制—中山王陵の構造的特質と思想—」『陵墓からみた東アジア諸国の位相—朝鮮王陵とその周縁』周縁の文化交渉シリーズ3, 関西大学文化交渉学教育研究拠点)。なお、思紹、尚巴志、尚忠、尚思達、尚金福、尚泰久といった歴代の国王が祭られていたともされる (大盛永意 (1999) 『第一尚氏物語—尚巴志王の三山統一とその後の王たち』沖縄国映エージェンシー)。
- 45) うるま市石川にあり、第二尚氏王統誕生の際、首里の「天山ようどれ」から遺骨を移葬し

たとされる。現在は本文に記したように南城市に移されている。

- 46) 人物像については「注36」を参照のこと。琉球の士族は、琉球風の名前と中国風の名前(唐名)をもっており、彼の琉球風の名前を「謝名(親方)利山」という(「親方」は位階・称号の1つであり、士族が賜ることのできる最高の称号)。恩納村谷茶にあるホテル「リザンシーパークホテル谷茶ベイ」は、1982年に聖グルムク・シンが沖縄を訪れ「当ホテル新築にあたっては、愛と犠牲の人生を生きた無名の偉人の名を冠すべし」と伝えたことから、琉球王国時代の三司官であった彼にちなんで名づけられた(リザンシーパークホテル谷茶ベイホームページ<http://www.rizzan.co.jp/yurai/index.html>)。

### 参考文献

- 赤嶺守(2004)『琉球王国—東アジアのコーナーストーン』講談社
- 井上秀雄監修, JCC出版部著(2011)『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版
- 伊波普猷(1969)『伊波普猷選集(上巻)』沖縄タイムス社
- 伊波普猷(1970)『伊波普猷選集(中巻)』沖縄タイムス社
- 伊波普猷(1962)『伊波普猷選集(下巻)』沖縄タイムス社
- 上里隆史(2012)『琉球戦国列伝—駆け抜けろ!古琉球の群星たち!』ボーダーインク
- 上里隆史・喜納大作(2015)『新装改訂版 知れば知るほどおもしろい 琉球王朝のすべて』河出書房新社
- 大城立裕(1992)『琉球の英傑たち』プレジデント社
- 沖縄県の歴史散歩編集委員会編(2014)『沖縄県の歴史散歩』歴史散歩47, 山川出版社
- グレゴリー・スミッツ著, 渡辺美季訳(2011)『琉球王国の自画像—近世沖縄思想史—』ペリカン社
- 桑江克英訳註(1971)『球陽』三一書房
- 崎浜秀明(1984)『蔡温全集』本邦書籍
- 佐藤亮(2011)『蔡温の言葉—琉球宰相が残した物語り』ボーダーインク
- 高良倉吉(1993)『琉球王国』岩波書店
- 高良倉吉(2012)『琉球の時代—大いなる歴史像を求めて』筑摩書房
- 高良倉吉, 當眞嗣一, 安里進, 田中健夫, 豊見山和行, 池宮正治, 田名真之, 真栄平房昭, 村井章介(1991)『新 琉球史—古琉球編—』琉球新報社
- 渡久地十美子(2011)『ほんとうの琉球の歴史—神人が聞いた真実の声』角川学芸出版
- 原田禹雄訳註(1998)『蔡鐸本 中山世譜』琉球弧叢書4, 榕樹書林
- 比嘉康雄(2000)『日本人の魂の原郷 沖縄久高島』集英社
- 東恩納寛惇(1952)『校註 羽地仕置』興南社
- 保城広至(2015)『歴史から理論を創造する方法—社会科学と歴史学を統合する』勁草書房
- 真栄田義見(1976)『蔡温・伝記と思想』月刊沖縄社
- 諸見友重訳註(2011)『訳注 中山世鑑』琉球弧叢書24, 榕樹書林
- 吉成直樹監修(2013)『琉球王国がわかる!』成美堂出版
- 湧上元雄・大城秀子(1997)『沖縄の聖地—拝所と御願』むぎ社

**参考サイト**

JCCweb美術館〈<http://art.jcc-okinawa.net/>〉 2016年 8月16日アクセス

がじゅまるの樹の下で。〈[http://blog.goo.ne.jp/wa\\_gocoro](http://blog.goo.ne.jp/wa_gocoro)〉 2016年 8月16日アクセス

首里天楼ホームページ「蘇る琉球の偉人達」〈<http://www.suitenrou.com/ijin/>〉 2016年 8月16日  
アクセス

本稿は、増田康弘（2016）『最近思うこと（試論）—福祉と社会と自分について考える—』に掲載した文章「墓参り」に加筆・修正したものである。